

〔Arrigo Cappelletti の研究〕

中野二郎 著

京都同志社大学マンドリンクラブの昭和44年度指揮者岡村光玉君は49年（1974年）3月マンドリン音楽探究の目的を持ってイタリアに渡り、目下シエナにあってイタリア語の勉強を始めている。

身辺未だ充分落ちついていないのに早くも珍しい情報の数々を齎（もたら）してきた。

所用を兼ねたり演奏又は観光のかたわらでは到底知ることの出来ない興味深い情報だけに斯ういうことに関心の深い本誌の読者の方々にお伝えしておきたい。

まずCappellettiのことであるが、彼の名はマンドリン讃歌フローラや劇的序楽で親しまれている。

しかしその解説なるものを見るとほとんどがアブノーマルの作家ときめつけられている。

これは1936年（昭和11年）武井氏がその誌『マンドリンギター研究』で彼について述べているところを鵜呑みに受け継いだものようである。

念のために武井氏の説を再録すると

〈カッペッレッチェについて 武井守成〉

「アルリーゴ・カッペッレッチェ（Arrigo Cappelletti）という人は一種の変質作家である。

一般に最も馴染まれているInno Mandolinistico Floraでさえ可成りアブノーマルな風格と手法をもっている。と云って彼は決してモダンな作家ではない。

やはりロマンティシズムの中をさまよう一人なのである。

唯彼の作品はロマンティシズムがゆがめられていると云う感を一般に与える。

それで一番困ることは彼の手法なり和声なりがどうも明快さを欠くことである。

と云って彼は決して凡庸な作家ではない。

彼自身としては彼の作品に対する明らかな主張と同感をもっていることは間違いないのである。

強いて云えば彼は結局妥協性の少ないエゴイストなのであろう。

そしてそれは彼の長所であると同時に短所である。

Misticaという小品がある。

小品ではあるが充分内容的にとり上げられる作品であるにも拘らず親しまれにくいのはどうしたわけであろう。

やはり前述の理由によるのである。

彼の大作として知られたOuverture Dramatiqueはイタリアに於いてコンコルソに一等当選の栄を荷なった。

そしてそれは合奏団競演会の課題曲として選ばれたことさえある。

しかしながら今日まで充分作家を満足せしめた演奏は一回もなかったのではなからうか。同時にこれを満足して指揮し得たコンダクターも又一人も見出せないのではあるまいか。冒頭豪壮なラルガメンテに稀ノーマルな形を示したこの曲も本体のアレグロに入ってから明快さを全く欠いて混沌たる雲の中に没入して了う。

人は時にファルポとカッペッレティとを対照してその類似点を挙げる。

それはおそらく一般に難解なアブノーマルな点を指すのであろうが、しかし実際にはこの二人は全く異った素質をもった作家である。

ファルポはアブノーマルに見えて決してそうでない。

特に楽器の扱方については未曾有のいい頭を持っている。

カッペッレティはアブノーマルと云うよりも自己的な主観作家であり、同時に楽器について甚だしく無知であると言ふことが出来る。

この無知が楽器の扱方が彼の作品をより余計に解りにくいものになっていることは確である。

それはともかく劇的序楽は私も今まで何回か手がけてみた。

けれども、常に自ら満足し得ずに終っていたのである。

しかしこの序楽が少なくともコンコルソの一等に入選しただけの価値を見出したいと云う考えから長い間譜面を凝視して始めて一つの結論に到達したのである。

それは彼の無知な楽器の扱方を演奏上の特異な方法によって少くとも彼の描いている曲の実質にまで引上げることである。

彼の最大の欠陥は各楽器の結合による音の色彩についての無知である。

そのために音は純正な明確さを欠くことになる。

で私はこの色彩の対照の混迷さを音の強弱によって補いそれによって少くとも各楽器の独立性を生かそうと考えたのである。

もとよりこれは消極的な救済である。

真個の救済が全曲を編集し直すことにあるのは論を俣たないが、それは軽々しく着手し得ないことである。

この実験に得た所は、この序楽が本質的な全貌を現わしかけたことであり、長い間の懸案が稍（やや）解決されようとしてきたことである。

従来一度も私たちのコンサートプログラムに載らなかったこの曲も或は近く上演の運びをみるかも知れない。

親しみ難いカッペッレティ。

彼は確かに一般から遠ざけられている。

けれども彼は決して近よれない作家でなはいと考える。」

そしてその年の秋の演奏会に劇的序楽が上演され曲目解説として、

〈劇的序楽〉

「イタリアのイル・プレットロ主催第四回作曲コンコロソに一等賞を捷ち得たもの。

元来この作家は特に弦楽器の扱方においてアブノーマルであり、そのために曲を難解な従って表現困難なものとしている。

これが彼を一般から近づきにくくさせる第一の原因であるらしい。

特にこの劇的序楽は一般に馴染まれていない我邦において演奏されたことも僅かに一、二回を出ていないようである。

特異な演奏手法を用いる以外この曲に真の生命を与えることは困難なようである。」

以上がカッペッレティの作品に対する武井氏の考え方であるが、カッペッレティその人についての経歴、人となりについては何ら触れられていない。

Alberto de Angelis著

L'Italia musicale d'oggi Dizionario dei Musicisti Roma 1922

C.Schmidl著

Dizionario Universale dei Musicisti Milano 1929

上記の二冊辞典によればArrigo Cappellettiは1877年1月16日コモに生まれ最初この町の

Pozzolo教授にピアノ・オルガン、対位法を学び

更にボローニアのCesare dallolio教授には作曲法を、そしてボローニアの

R.Accad、Filarmonicaでは1900年にピアノを、1901年に作曲法を、

1913年に吹奏楽、夏にミラノのヴェルディ音楽学校で1905年にオルガン、1911年には合唱のディプロマを獲得した。

演奏会及び劇場の指揮者として活躍するかたわら度々作曲コンクールに入賞し、コモの聖フェデーレ教会のオルガニストをつとめた。

作品にはミサ・夜曲、数多のオルガン曲、プレットロ四重奏曲劇的序築、ヴァイオリンとピアノの三楽章のソナタ、

同じくオルガンのソナタ、歌とピアノのRomanzeなどがある。

マンドリン関係の作品として筆者の手許で判明しているものは、

Bolero	c	1934	I.P
Danza dei piccoli amori	c	1906	I.P

Bolero c 1934 I.P

Danza dei piccoli amori c 1906 I.P

Danza delle Driadi (G.Raff) c I.P

Elegia j 1909 I.P

Inno Mandolinistico "Flora" e 1907 I.P

Intermezzo Romantico c 1927 I.P

Minuetto c I.P

Mistica e 1931 I.P

Onde Armonioso

Ouverture Dramatique e 1926 I.P

以下、岡村君の贖（もたら）した情報である。

岡村君は本年（1974年）4月9日ルガーノ（スイス）にBarvas（アラビアの隊商を書いた作曲家）未亡人を訪ねた帰途コモに立ち寄り、

先づ電話帳でCappelletti姓を調べたところ何と70人も居り、これはあきらめて警察に行っ

て彼の写真を見せ、彼の子孫もしくは親族を調べてほしいと切望したところ、親切にも三人の警察官が市役所に行ったりAcademia Muscale di Comoに電話したりしてやっと住所をつきとめた由。

そこで判ったことは彼カッペレッティは1946年10月16日コモで亡くなり、二人の息子があつた。

Fulvio (1911.8.21生れ) が建築家、Ennio Maria (男性) (1921.8.21生れ) がミラノに住んでいと云う。

長男Fulvioの息子がArrigo (イタリアでは祖父の名を受けつぐ) を名のつており、1949年生れでジャズピアニストで活躍中と云う。

その孫の所で知った作品のメモは、

Intermezzo Sinfonico

op.48

Orch

1900

Intermezzo Sinfonico op.48 Orch 1900

Sinfonia in Sol op.76 1902

Inno-Marcia op.107 Pf 1906

Postludio Pastorale op.188 Organ 1918

Postludietto (Finale Festoso) op.191 Organ 1918

Devozione Organ

Elegia ai caduti per la Patria Pf 1919

Piccolo minuetto Pf 1919

Tristezza Pf 1919

Piccola mazurca (1921 nato di Ennio,Suona) Pf 1919

Valzer op.203 Pf 1919

Poemetto d'Amore Pf 1919

Saltarello Siciliano Pf 1919

Pasacaglia Pf e Organ 1923

Inno a Roma (1929 Nov,rappre) op.225 Coro Orch 1926

Inno Avolta Pf 1927

Fuga per Pf in tema mia op.278 1936

Sonata Fantastica in 4 tempi Pf

Fuga in A min op.339 Pf 1941

Serenata Gioiosa op.340 Pf 1941

Adagio appassionato Fuga op.341 4Voci

上記のうちInno Marcialはピアノに書かれてはいるが、之が作者によりマンドリン合奏に編曲されてイル・プレットロで出版を見たFloraである。

猶劇的序楽は最初ヴァイオリンの為に作曲され、後にマンドリン合奏に編された由。

作者が指揮していたコモのフローラ合奏団には古い楽譜は戦災で全部焼けて了い何も残っていないとのこと。

祖父、つまり作者のArrigoについて岡村君は次のように伝えている。

年少時Comoにおいて作曲家でありオルガニストであったEttore Pozzoli（いる・ぷれっとろにはPozzoloとなっていますが）からピアノ、オルガン、和声楽、対位法を学び、その後ミラノに行き更にボローニアに出てM.Cesare dallolioを師とし、作曲法及び指揮法を学び、同地のFilarmonicaで1900年から一年間で実に7科目を修めたとのこと。

普通こんなに沢山とることが許されないし、また取れないそうです。

2・3科目を2・3年でやるのが普通で7科目だと7・8年はかかるとのこと、それを1年で修めたと云うので当時は評判になったとのこと。

その後コモに帰り、同地の劇場の指揮者及び聖フェデーレ教会のオルガニストとなったわけですが、

これには面白い経緯があってイタリアの都市には必ず一つその町を代表する大きな

Duomoがありオルガンも名器が設置されているが、

しかしこのDuomoは封建主義時代その都市の君主を初め有力貴族のみの祭礼祈祷が行なわれるのが普通で一般庶民は地区地区にある教会に行く慣わしで、従ってオルガニストにとってもDuomoで奏することを名誉としていたわけですが、

カッペッレティはこれを嫌い（つまり専制的、独断的に指図されて演奏しなければならない）

Duomoからそんなに遠くはないが民家の中にひっそり立っていて教会としては小さい部類に入るであろう聖フェデーレ教会で自ら進んで奏したと云う。

彼は終生ソシヤリスティックな考えを持ち続け、自由を非常に愛した人であったと云う。

その頃オルガンの為に沢山の作曲がなされ、各地の作曲コンクール（ほとんどがオルガン曲）に度々入賞した。

1911年パリーでオルガンのためのOffertorioの作曲に対してDiplomaを得たのは最重要であると云う。

その他のエピソードとしては、彼はコモの山々（コモは山で囲まれた都市）をこよなく愛し、その山々を歩くことが大変好きであったと云う。

またある時、ミラノのスカラ座で行われた演奏会をきくためにわざわざ往復とも歩いたそうである。

Violaも奏しUgo Bottachiariと親しかったと云う。

猶Inno-MarciaつまりFloraがピアノ曲として誕生したのは1906年3月9日で作品107番である。

ここで岡村君の報告と矛盾することを二、三書きとめておきたい。

年少時Ettore Pozzoliにピアノ、オルガン和声学対位法を学んだとあるのは、やはり私はBartolomeo Pozzoloと思われる。

知名度では或はEttore Pozzoli（1873－1957）が高いかも知れないがBartolomeo Pozzoloはコモのフィラルモニカ協会の設立者で教会音楽の指揮者で、而もFloraのスコアにはBartolomeo Pozzoloに贈る旨が書かれてある。

もう一つは一ヶ年で7科目を修めたのが評判になったとのことであるがDe AngelsのDizionario dei Musicistiには夫々の課目の修了年次が書かれていることであるが、要するにCappenettiの楽才が並々でなかったことを窺わせるものである。

(1974年発表されました)